

# 『三升増鱗祖』論

——典拠と制作時期に関する考察——

吉田 慎一 朗

はじめに

恋川町画作『三升増鱗祖』みすますうるこのはしめは、安永六年（一七七七）正月、鱗形屋から刊行された黄表紙である。その粗筋は次の通り。

近江国伊吹山の麓に永持道意という艾商がいた。ある時、道意は伊豆池洲稻荷の霊夢によつて、戦に敗れ逃げてきた源頼朝を助ける。その後、弥平兵衛宗清に生け捕られた頼朝の遠流が決まると、共に伊豆国へ下り、池洲稻荷の傍に艾店を出す。一方、隣家の草双紙屋の山内屋孫兵衛も、池洲稻荷の霊夢により頼朝を守るべく働く。頼朝は艾の卸売中、北条時政の娘政子を見染める。政子も頼朝に恋焦がれ患い付く。医者くたす流庵の指示で、道意は艾を、孫兵衛は書物を持ち寄つて政子の治癒に努め、頼朝と政子の恋の仲立ちもする。頼朝と政子は結ばれ、道意は三升の家紋を、孫兵衛は三鱗紋を、時政から賜る。道意は三升屋平右衛門と名を改め江戸大伝馬町に艾店を出し、孫兵衛も隣に鱗形屋と屋号を改め草双紙店を開く。この度のことは

自分の功績だと互いに密かに競い合う二人は、夢の中で艾と書物の合戦を始めるが、合戦半ばで池洲稻荷の御宣託を得て和睦する。

本作は、鱗形屋孫兵衛と三升屋平右衛門という実在する二人の店主を登場させ、ほぼ全丁にわたつて両店の宣伝を行った作品である。かかる奇抜で大胆な宣伝黄表紙は、草双紙の歴史全体でも極めて異例とされ、式亭三馬選定の名作黄表紙廿三作の一つにも数えられる。注1また、棚橋正博編『黄表紙総覧』注2では、本作が鱗形屋の商売物である書物を擬人化し異類合戦の趣向を取るといふ点で、春町画作『辞鬪戦新根』（安永七年刊）、山東京伝画作『御存商売物』（天明二年（一七八二）刊）の先蹤をなす作品であると整理されている。

従来の春町研究における本作の重要度は、さほど高くない。森銃三氏は本作の宣伝黄表紙としての珍しさを認めつつも、「やや木に竹を継いだやうな形で、感心しかねる」とし、「やや無理な趣向を立て過ぎた形であり、春町の作品としては、上乘

のものとは称し難い。巻中の對話などにも、特にみるべきものがないのが寂しい」と評価している。<sup>注3</sup>

松田高行氏は本作の成立背景について、「上・中巻が鱗形屋が宣伝に終始したため、黄表紙の持つ味わいが全く欠けてしまったので、後から黄表紙的な異類合戦の話を加えたというような経緯かもしれない」と推測しており、春町の黄表紙における作者性や表現上の特徴を見るには参考にならないと述べている。<sup>注4</sup>

しかし、本作に見られる軍記物語や浄瑠璃を踏まえた場面を分析すると、転用された素材はいずれも、窮地に追い込まれた人物を中心に据えている点で奇妙に共通していることに気付く。本論では、まず『三升増鱗祖』の典拠作品に見られる共通性を検討する。次に本作が制作・刊行された時期の鱗形屋の経営状況や不祥事を取り上げ、春町の鱗形屋に対する危機意識が本作の典拠選定に反映されている可能性について検討したい。

なお『三升増鱗祖』の絵は国立国会図書館本を、本文は松原哲子氏の論文<sup>注5</sup>に載る、国立国会図書館本を底本とする原文表記の翻刻に基づきつつ、それを適宜私に改訂して使用する。

## 一、軍記物語・浄瑠璃作品の素材から見出せる主題

恋川春町の黄表紙には、軍記物語を題材としたものが多い。『三升増鱗祖』にも、軍記物語やそれをもとにした浄瑠璃作品に素材を取った表現・場面が見られる。既に述べたように、本

作は宣伝目的で制作されたものであり、特定の事実を穿つものではなかったというのが従来の認識となっている。しかし、本作の典拠に注目してみると、共通点があることに気付く。

### (a) 『平治物語』

『三升増鱗祖』上巻冒頭部において、頼朝が伊吹山に落ち延び、弥平兵衛宗清に生け捕られ、池禪尼の情けによって死刑を免れ、伊豆への遠流が決まるといふ展開は、『平治物語』を典拠としている。春町はここで、鱗形屋と三升屋が出会い、共に頼朝を助けるという上・中巻の主筋に繋げるための前提として、舞台設定・枠組みを『平治物語』から借りてきている。

こうした典拠の利用法は、軍記物の時代背景や人物群を「世界」とし、そこに新しい「趣向」を凝らすという浄瑠璃・歌舞伎の作劇法に通じている。中村幸彦氏は、『三升増鱗祖』の画面や書入れ、台詞など随所に歌舞伎の要素が色濃いことを指摘し、歌舞伎流行の高まりに合わせて草双紙の表現にも変化が生じつつあると分析する。<sup>注6</sup>本作が歌舞伎的発想のもと制作されたならば、春町は細部に限らず、話の枠組み自体を構想する上で、『平治物語』を本作の「世界」として借用していると言える。

『新版歌舞伎事典』<sup>注7</sup>によれば、軍記物語が近世演劇における「世界」として利用されるためには、第一にその作品が江戸庶民一般に広く認知されていることが条件であり、第二に、必ずしも原典に忠実である必要はなく、中世以降の諸芸能において繰り返し上演される中で、人物関係や物語展開が類型的な内容

を持つことが条件となる。では、『平治物語』はどうだったか。

『新編日本古典文学全集』解説によれば、『平治物語』の刊行は「江戸時代初期に古活字本として初めて行われ、後にその類の本文が整版本として版行された<sup>注8</sup>」。近世出版史の観点から見ると、古活字版の刊行後、費用対効果の高い整版への回帰に合わせて増刷されたのは、『平治物語』に見込めたからだろう。

では春町はどのように『平治物語』を使用しているか。以下本論では、陽明文庫本を底本とする『新全集』をもとに考える。まず、『三升増鱗祖』一丁裏の絵(図1)と本文を次に挙げる。



図1

頼朝公は軍の利を失ひ、石山寺より只ひとり、伊吹山の辺へ落ちゆき給ひ、道意が家の辺にさまよひ給ふを、道意、もし頼朝公ならんかと心づき、様子をたづね申すに、相違なければ、大いに悦び、かくまひ申し、食事をす、めまい

らす折ふし、平家のさむらい弥平兵衛宗清おっかけ來り、生け捕り都へ伴ふ。

この場面では、『平治物語』下巻「頼朝青墓に下着の事」及び「頼朝生捕らるる事付けたり夜又御前の事」が踏まえられる。

「頼朝青墓に下着の事」の粗筋は次の通りである。小平という山寺の麓の里に迷い出た兵衛佐頼朝は、雪の中で立ち往生する。刀を抜いて神仏に祈るうと考えたその時、一人の鶴飼が現れ、平家の武士たちが頼朝を探し回っていると警告する。頼朝はこの鶴飼に助けられ、飯と酒を勧められて匿われる。この後伊豆国へ流罪となった頼朝は、二十余年の歳月を経て真つ先にこの鶴飼を訪ね、恩賞を与えた。『平治物語』における鶴飼の役割を、『三升増鱗祖』では艾商の永持道意が務めているとわかる。

一方、「頼朝生捕らるる事付けたり夜又御前の事」の粗筋は次の通りである。青墓に忍んでいた頼朝のもとへ、三河守頼守の命で、弥平兵衛宗清が派遣されてくる。遊女の密告により宗清は頼朝の潜伏を知る。頼朝は捕まる前に自害しようとするが、平家の侍たちが大勢押し寄せ、生け捕りにする。

続いて、『三升増鱗祖』二丁表の絵(図2)と本文を見てみる。

頼朝、池禪尼の情けにて、伊豆の国へ遠流定まりければ、いよ／＼池洲稻荷の御告げ、むなしからずと、道意大いに悦び、伊豆の国へ付き添ひ参たきと、六波羅へ願ひすみて、



図 2

旅の用意取りまかなひ、伊豆の国へところろぞす。

この部分は、『平治物語』下巻「頼朝遠流に宥めらるる事付けたり呉越戦ひの事」を踏まえている。命だけでも頼朝に助かってほしいと考える宗清は、平頼盛の実母にして清盛の継母である池禪尼に望みを託す。池禪尼は山法師の呪詛で子息右馬助家盛を失っており、その家盛に頼朝は生き写しだった。池禪尼の希望は、初めこそ清盛に却下されるが、重盛の説得によりとうとう承諾を得、頼朝は処刑を免れて流罪に宥め置かれる。

以上、『三升増鱗祖』に『平治物語』からの影響が見られることを指摘した。冒頭だけが、その後の展開を支える時代背景・舞台設定を提供すると共に、「もし頼朝を助けたのが鶴飼ではなく艾商だったら」という仮定から本作が発していることから、『平治物語』の本作における存在感は絶大なものと

言える。

春町が『平治物語』を本作の「世界」としたのはなぜか。

日下力氏は、『平治物語』<sup>注9</sup>がその成立過程で大きく三段階にわたり変質していると分析する。即ち、成立初期段階の語り手は謀反側の源義朝を蔑視する姿勢だったが、第二段階では一転して義朝の悲劇的生涯と、子息頼朝による源氏再興への伏線としての語りへと変容する。更に第三段階では、儒教思想に基づく批評が加わる。『三升増鱗祖』の典拠となった章段が、全て頼朝を中心とする『平治物語』下巻から取られたことから、春町は『平治物語』を頼朝による源氏再興の物語と捉えていた可能性が高い。このことが後々本作の主題を考える上で重要となる。

#### (b) 『太平記』

次に、『三升増鱗祖』の典拠として『太平記』を挙げる。

『太平記』はその成立以来、読み物として以上に、談義僧や公家・武士らが読み上げたものを耳で享受する、所謂「太平記読み」で一般民衆に広まった。近世に入るとこうした口演は講釈として確立される。つまり、草双紙や芝居にも取り入れやすく、庶民にとつて極めて馴染み深い媒体だった。

江戸時代における出版物としての『太平記』<sup>注10</sup>受容について、加美宏氏は、次のようにまとめている。

江戸時代に入ると、これまで限られた数の写本によって、

主に公家や大名クラスの武家によって賞翫されてきた『太平記』が、(略)町人などの庶民層にまで広範に流布しはじめた一方、戦国武家の『太平記』における政道や兵法への関心をうけつぎつつ、正成を軸として、『太平記』の記事に、主として政道論や兵法論の面から論評を加え、合わせて『太平記』記事に関連した異伝・裏話を豊富に収載した『太平記評判秘伝理尽鈔』『太平記評判私要理尽無極鈔』という評判書・秘伝書の一類が出現する。(略)『理尽鈔』は、江戸初・中期においては、『太平記』そのものに劣らない広範な流布ぶりを見せ、さまざまなジャンルの『太平記』物・楠木物の文芸にも大きな影響を及ぼしたのである。

つまり、幅広い層に『太平記』が浸透する過程では、原典の内容より『理尽鈔』等による解釈や人物・事件の大まかなイメージが共有された。芸能や文芸の「世界」としての『太平記』も、やはり虚構化されていた。『三升増鱗祖』の典拠も当時の読者には常識だったはずで、必ずしも原典に拠るとは限らない。最初に『三升増鱗祖』十丁裏の絵(図3)と本文を挙げる。

艾屋の息子、頼朝なる事を時政かねて知りたる事なれば、政子と祝言をと、のへ、悦ひけり。扱、政子姫の病氣速本復ありしは、永持道意が艾を三升握へられし故なれば、艾屋には三升を家の紋所にせよとて給りけり。ならびに平氏



図 3

の平の字を褒美としてとらせける。扱又三升の灸を退屈なく据へられしも、山内屋孫兵衛が草双帯をかつく見給しゆへなれば、孫兵衛は道意に同様の功也とて、孫兵衛には江のしまの弁財天より給はりし三ツ鱗の紋所を褒美としてくれられ、長く定紋にせよとぞ申渡されける。

孫兵衛が北条四郎時政から賜った「江のしまの弁財天より給はりし三ツ鱗」は、『太平記』巻第七「時政榎島に参籠の事」を典拠とする。この短い章段の語り手は、南北朝時代から鎌倉草創期へと時代を巻き戻し、次のように語る。

北条時政が江ノ島参籠の折に子孫繁栄を願うと、赤袴に柳裏の衣を着た美女が現れ、時政が前世で果たした善根により、現世で栄華を極めると告げた。女が大蛇となり海中に潜る時、大

きな鱗を三つ落とし、時政はそれを旗に貼り付け、家紋とした。『太平記』はこれを江ノ島弁財天の御利生として北条の起源を神話化する。更に語り手は時代を南北朝へ戻し、「(栄華は)七代を過ぐべからず」という弁財天の言葉に対し、現相模入道北条高時は九代目に当たるため、北条氏の滅亡が近いとする。

春町はこうした神話的エピソードを持ち出すことで、鱗形屋の家紋である三鱗紋の由来をこじつけている。そこには鱗形屋の末永い繁盛を願って縁起を担ぐ意味があるのだろう。しかし、原典の家紋起源譚は、北条氏の滅亡という事実と結びつけられ、講釈で語られる際もそうだったはずだ。つまりこの章段には、単にめでたいだけでない、不穏な空気が常にまとわりつくのである。自作に軍記物語を多用する春町が、このことを知らずに典拠としたとは考えづらい。

次に見るのは十四丁裏・十五丁表の絵(図4)と本文である。

草双帯の方には初度の軍、大に利を失ひ、無念骨髄に徹し、この度は楠流のはかりことを以て大釜へ熱湯をた、へ、水はぢき、飛龍水、又は長柄の柄杓などにて、煮え湯を浴びせければ、艾の精大きに辟易し、す、なきふんにて百丁、逃げ足の速きやつは千丁ばかりも逃げ延びたり。

『三升増鱗祖』下巻では、鱗形屋孫兵衛と三升屋平右衛門(永持道意)の夢の中で、絵草紙と艾の精霊が合戦を繰り広げる。初め劣勢だった絵草紙の霊が「楠流のはかりこと」で艾の精に



図4

反撃するのだが、その合戦風景を描写したのがこの場面である。「大釜へ熱湯をた、へ」「長柄の柄杓などにて、煮え湯を浴びせ」るのは、『太平記』巻第三「赤坂の城軍の事」の熱湯攻めの戦いをモチーフとする。概要を記すと、関東軍が楠木正成の立て籠もる赤坂城に押し寄せた。寄手三十万騎に対し、正成側

の軍勢は圧倒的少数。この時の正成の策略の一つに、塀を破ろうとした寄手に、長柄杓で熱湯を浴びせるといふ戦法がある。

図4の挿絵では、絵草紙の精が艾の精に長柄杓で熱湯を浴びせており、画面左側には大釜の煮え湯が描かれている。赤坂城の楠木正成の奇策をパロディ化した場面なのは明らかである。

一方、「水はぢき、飛龍水」も「楠流のはかりこと」の一つとされていることから、『太平記』巻第五「千劍破の城軍の事」を踏まえているとわかる。概要を記すと、赤坂城落城後、再び正成の立て籠もる千劍破城に、寄手百万騎が攻め寄せた。城内の軍勢が千人に満たぬ中、正成は再び軍略家の腕を発揮する。やがて痺れを切らした関東軍が堀に長橋を架けて城へ討ち入ろうとすると、正成は橋上に松明を投げ、水弾き（水鉄砲）で油をかける。結果、数千の兵が業火に包まれ橋と共に谷底へ落ちた。

この内容からわかる通り、『太平記』の楠木正成は「水弾き」を油をかけるために使うが、『三升増鱗祖』ではこれを熱湯を浴びせる攻撃手段として登場させる。挿絵にも熱湯攻めの場面しか描かれていないため、「水はぢき」という語が使われていることだけを判断材料に「千劍破の城軍の事」が踏まえられていると断定するのは性急すぎるだろう。しかし、この章段が当時「赤坂の城軍の事」と並び正成の智謀を示すエピソードとして有名であり、歌舞伎や戯作に取り入れられたことは事実である。

「千劍破の城軍の事」が草双紙に踏まえられた事例として、

和祥作『楠末葉軍談』(宝暦十三年刊、鶴屋版)から、十四丁裏・十五丁表の絵(図5)と本文が挙げられる。



図5

正察が方へは、仁木弾正左衛門百騎計にて向かひけるが、小門を締め置たる故、打破らんとすると等しく、屋根の上より竜吐水の毒水、雨のごとくに落ちかゝり、仁木を始め

数多の討手、これに当たり、悶へ苦しみ死したりけり。

『楠末葉軍談』は、慶安事件に取材した『慶安太平記物』と呼ばれる系統の中に位置づけられる。しかし、本作の「竜吐水」について、『新日本古典文学大系』の木村八重子氏による注では、「浄瑠璃『太平記菊水之巻』にも実録の慶安太平記にも竜吐水の仕掛は出ていない。太平記・巻七「千劍破城軍事」に見える、油を滝のように流した水弾からの着想と思われる」とある。但し、図5の挿絵の壁越しに毒水を浴びせる様子や、「悶へ苦しみ死」ぬところなど、どちらかと言えば「赤坂の城軍の事」における熱湯攻めのほうが踏まえられているようにも思われる。

『三升増鱗祖』と『楠末葉軍談』の典拠としての『太平記』の扱いから言えるのは、「赤坂の城軍の事」の熱湯攻めと「千劍破の城軍の事」の水弾きの二つが屢々混同され、正成の武略・智謀を示す例として一括りにされていたらしいことである。この『太平記』の二つの合戦譚が受容過程において混同される理由は、熱湯であれ油であれ、浴びせるといふ戦術である点で共通することもあるだろうが、ここでは楠木正成の置かれた状況が似ている点に着目したい。共通点の一点目として、どちらも大勢の関東軍に対し楠木側は圧倒的少数で城内に立て籠もっている。更に二点目に、正成の策略は確かに幕府軍を欺くのに充分有効ではあったが、会心の一撃にはなり得なかつた。

赤坂城における熱湯攻めは、正成が逃亡するための時間稼ぎ

になった。事実、その後すぐに城は陥落し、その上自害したと見せかけて城を脱出した正成は、長崎の厩の前で敵に発見され、肘に矢を射かけられたが、長年愛読していた観音経が「はだの守り」となって無傷のまま逃げ延びたと『太平記』は語る。一方、千劍破城における水弾きと火を使って橋ごと敵を谷底に落とす策略は、折よく六波羅陥落の報せによって幕府軍が退去しなければ、赤坂と同様に落城されるのは時間の問題だっただろう。正成が討死せずに済んだのは、本人の頭脳のおかげだけでなく、神仏の加護や強運によって救われたのである。

このような正成の神秘的伝承について兵藤裕己氏は、背景に正成の本拠地・南河内一帯で中世に行われた広範な太子信仰があり、「もとは山伏や陰陽師など、下級の宗教民・芸能民の兵法伝承として発生したものだろう」と述べる。更に氏は、太子信仰の担い手が山伏配下の賤民だったことと、自身「民間」在野の士として『太平記』に描かれる正成が、葛城山系の山伏や職能民を勢力基盤としたらしいことを重ね、彼ら下層民が「忍び」の出自となった事実から、こう述べている。

楠正成が駆使する奇抜な兵法は、太平記で「世の常ならぬ合戦の体」といわれている。敵の頭上に大石・大木をふらし、熱湯を浴びせかけ、釣り堀や藁人形の奇策をもちいるなど、正成の戦法は、いずれも鎌倉武士たちのそれとはおよそ異質である。正成流の兵法は、戦国時代には「忍び」の兵法（いわゆる忍法）としても伝承されている。



つまり、楠木正成が危機的状況を脱する英雄として語られる時、その具体的な戦法に言及する以上、卑賤な野伏集団の頭領の側面が否応もなく浮上する。天皇の「忠臣」正成がいかにも有能な人物であれ、その本質は「民間」なのだ。一方正成は、兵藤氏の言葉を借りれば、武家政権に対し「異様・グロテスクともいえる敵意をいだ」くキャラクターでもある。不利な状況に追い込まれても不屈の精神と知能と信仰心で切り抜ける姿は、ぎりぎりでも踏み留まる叩き上げの粘り強さを感じさせる。正成の英雄譚は、神仏関連の後ろ支えがあつて初めて完成するのだ。

ここまで『太平記』からの典拠を検討してきた。「時政榎島に参籠の事」には北条氏滅亡が暗示されていた。赤坂城、千劍破城における正成の活躍は、一時的な危機回避に過ぎなかった。そう考えると、春町がこれらを素材に選定した背景にも、不穏な気配が充満しているのかと思われてくる。

(c) 『神靈矢口渡』

最後に『三升増鱗祖』七丁表の絵(図6)と本文を挙げる。政子姫の治癒のため、孫兵衛が道意に協力を請う場面である。

道意、孫兵衛が志を感じ、頼朝公よりあづかりし白旗を取り出し、孫兵衛に見せて心程を明かす。

「かうした所は矢口の渡りの道念といふ意味なれど、我らはもはや丁人となり、さればふた、び斬つたり張つたりは



図6

気がなし。たゞあなたを世に出して上たい存念さ。我らが切つたりはつたりは、艾を切ったり、蓋の紙を貼つたりじや。」

「矢口の渡りの道念」は、福内鬼外(平賀源内)作の浄瑠璃『神靈矢口渡』四段目「道念庵室の場」を踏まえた表現である。

『神靈矢口渡』は明和七年(一七七〇)正月、江戸外記座にて初演された。武州矢口渡で横死した新田義興の霊が雷電になったという新田神社の縁起を、『太平記』巻第三十三「新田左兵衛佐義興自害の事」を題材に脚色した、鬼外の代表作である。

浄瑠璃評判記『儀多百量<sup>注13</sup>』では、本作について「近頃の大でき矢口の渡切より五段目迄ぬけめのないは此上るり」とある。また曲亭馬琴は『近世物之本江戸作者部類<sup>注14</sup>』で、作者源内について、「浄瑠璃の新作をもて一時に都下を噪したり」とし

ており、岩波文庫の註釈ではこの記述は『神靈矢口渡』を指すものとする。この作品が上演当時好評を博したことが窺える。

典拠となった「道念庵室の場」の粗筋は次の通りである。

新田義貞の子・義興が竹沢らの謀略により討たれた後、その弟・義岑は幕府から追われる身となり、恋人の臺と共に東海道を下り、神奈川の生麦村へ来る。僧・道念の庵室に匿われた二人が、道念がなぜ助けてくれるのか不思議に思い尋ねると、道念は仏壇から白木の箱を取り出した。中には新田家の家紋のついた白旗が入っていた。道念はもと新田家の旗持ち役で名を久助といった。矢口の渡での義興の死を無念に思い、一度は死のうとしたが、この白旗を義岑に渡すべく庵室を構えて待っていたと明かす。義岑はこれを聞き、自分が放蕩の末に竹沢に騙されたために兄は死んだと涙を流す。殺してくれと乞う義岑に、道念は新田家の再興を促す。折しもそこへ、村の百姓たちが義岑の居場所を嗅ぎつけ捕えようと押しかけると、道念は鉈を振り上げて百姓を撃退し、その隙に義岑と臺を逃がすのだった。

『三升増鱗祖』の道意が『神靈矢口渡』の道念に重ねられているのは、どちらも「道」がつく人名であることから発想されたものだろう。だからといって、孫兵衛まで義岑と重ねられていると言いつつは出来ないが、肝心なのは、義岑自らの放蕩で崩れかけた新田家の再興が促されるという展開と、『三升増鱗祖』における、政子姫が病に倒れた危機的状況を前に形勢を立て直すという展開が、類似しているということである。

ここまで、『三升増鱗祖』に三つの典拠が踏まえられていることを検証してきた。注目したいのは、その内容や該当場面における中心人物の置かれた状況に類似性が見られることである。

『平治物語』の源頼朝、『太平記』の楠木正成、『神靈矢口渡』の新田義岑は、いずれも逃亡者であり、窮地に陥るも踏み留まり、再興への意欲を覗かせる人物として描かれている点で共通する。しかも彼らの危機回避の方法は、必ずしも自力とは限らず、頼朝にとつての池禅尼、正成にとつての観音経、義岑にとつての道念と、神仏関連の人や物の助けに拠る点でも共通する。

更にもう一つ共通点を挙げよう。それは、典拠作品におけるこれらの人物の活躍場面が、その後の復活に必ずしも直結するわけではないということだ。頼朝は池禅尼の口利きで処刑を免れた。正成が見せた智謀も、関東軍に打撃を与えたものの、城を脱出するための時間稼ぎに過ぎない。「時政榎島に参籠の事」の江ノ島弁財天と時政にまつわる伝説にしても、『太平記』の文脈中では北条家滅亡という史実への伏線として語られていた。このように、『三升増鱗祖』の典拠には、複数の点で類似性が指摘できる。本作が版元の意向を濃厚に反映して制作された宣伝黄表紙であることは間違いないが、選ばれた典拠を具に見ていくと、確かに春町個人の作者性が同居していると考えられる。

春町は本作に、一般庶民に馴染み深く、かつ主題に一貫性のある典拠を綯交ぜにし取り入れることで、当世における何らかの危機的現状をそれらに投影し暴露しようとしたのではない

か。そこにはまた、現状を打破すべきと考える反面、完全な再興は現実的に不可能だと諦観する態度も窺えるのではなからうか。

次節では、その打破すべき現状が鱗形屋の経営状況のことを指すのではないかと仮定し検討する。

## 二、安永期鱗形屋の不祥事と経営状況

草双紙の新板制作は、翌年正月の刊行を目指して毎年秋頃に行われていたはずだ。『三升増鱗祖』は安永六年正月刊行だから、制作時期は前年秋と推定出来るが、これが明暦の大火以降の鱗形屋衰退の一因である重板事件と重なることは注目に値する。

近世節用集版權問題について佐藤貴裕氏がまとめたところによると、鱗形屋は安永年間に二件の重板事件を起こしている。<sup>注15</sup>

一件目は、安永四年五月九日から八月二十八日にかけて、江戸書肆の丸屋源六・鱗形屋手代藤八が刊行した『新增早引節用集』が、大坂書肆の柏原屋与左衛門・木屋伊兵衛が刊行した『早引節用集』の重板として出訴された。しかし須原屋市兵衛が仲裁に入り、丸屋・鱗形屋は板木七一枚・摺込本二八〇〇冊に売り払った六〇〇冊を加えた三四〇〇冊を差出し、内済となった。

二件目は、安永六年五月から安永七年正月一四日にかけて、『鱗形屋孫兵衛と手代徳兵衛が刊行した『早引節用集』が、一件目と同様の『早引節用集』の重板として再出訴された。今度は

内済では収まらず、重板を行った徳兵衛は家財闕所・十里四方追放、売主孫兵衛は過料鳥目二〇貫文、手代与兵衛・治兵衛は手錠、板木屋市郎右衛門も同様（ただし一〇〇日のみ）と、主要関係者は軒並み処罰を受ける結果となった。

佐藤氏によれば、他に様々な版元が節用集の重板を行っており、節用集がいかに利益の見込める商品だったかが窺い知れる。しかし二度も同じ版元から出訴されたのは鱗形屋のみである。この不可解な不祥事について佐藤氏は、黄表紙では十分な利益が見込めなかったかと推測する。明暦の大火以降衰退気味とはいえ、依然出版界の大手だった鱗形屋が重板という禁じ手を使ったのは実際の経営が逼迫していたことを示すと考えられる。

重板事件後の鱗形屋の動向について松木寛氏は、「重板事件は鱗形屋にとつて、金銭上の損失は当然のことながら、社会的信用の失墜の方が遙かに痛かっただろう。孫兵衛は鱗形屋の信頼回復を意図するかのよう<sup>注16</sup>に、黄表紙出版に積極的攻勢をかけている」と述べている。二件の重板事件に挟まれる形で『三升増鱗祖』が誕生したことは偶然とは思われない。宣伝黄表紙たる本作が孫兵衛の要請で制作されたならば、それは一件目の重板後の世間に対する弁明を目的としたと考えられる。またその作者に前年『金々先生栄花夢』で大当たりを取った春町を抜擢したのも納得がいく。しかし経営は上向かず、やむを得ず二件目の重板に踏み切った、という経緯だったのではないだろうか。

ここで、こうした安永五年とその前後の鱗形屋像を、第一節

で見た『三升増鱗祖』の典拠に見られる源頼朝、楠木正成、新田義岑らの姿と重ねてみると、その対応関係に気付かされる。

第一に、窮地に追い込まれ、脱出しようとする点で、両者は対応する。敗残兵の頼朝、絶体絶命の正成、お尋ね者の義岑らの姿は、財政的に追い込まれた安永期の鱗形屋と重なってくる。

第二に、その手段だが、鱗形屋が重板で収益を得たことは、正成の武士らしからぬ戦法のように、書肆として正攻法でない上に、一時的な危機回避手段に過ぎない。また『三升増鱗祖』の中で、孫兵衛は池洲稻荷の力を借りて三升屋と結びつき絵草紙屋の地位を確立する。こうした本作の孫兵衛像は、神仏に近い人や物に力を借りる物語上の人物たちのイメージにも重なる。

第三に、流罪の頼朝、逃亡者正成、滅亡した北条氏のように、本作刊行の翌年に再び重板を起こした鱗形屋の経営は悪化の一途を辿る。春町には先見の明があったと言えるかもしれない。

こうした複数の対応関係から、春町は本作の典拠における頼朝、正成、義岑らの姿に、鱗形屋の現状を重ねた可能性がある。本作の典拠利用が春町の危機意識の反映ならば、その危機意識とは、鱗形屋の不祥事や経営状況に向けられたものではないか。

安永期春町作品の大半が鱗形屋から刊行された以上、重板事件や経済的事情を春町は把握していたに違いない。そこで実際の事件や人物名を軍記物語の世界に置換するという芝居の手法を、版元の現状を暗示する手段に応用したのではないか。『三升増鱗祖』には、当時の人々にとって常識的な典拠が引かれていたため、一見何の含みもなく見える。しかしそれは宣伝とい

う目的を損なわない工夫で、「読みようによって鱗形屋の現状と重なる」程度の淡い関連性に留めようとしたためと考えられる。

鱗形屋信頼回復策の一環としての『三升増鱗祖』制作は、その将来を憂慮する春町にとって好機だったのだろう。店の看板を汚さず典拠を通じて現状を暗示する手法は、作者の腕の見せ所でもあったのではないか。

### おわりに

本論では、『三升増鱗祖』の典拠『平治物語』『太平記』『神靈矢口渡』の該当場面を検討し、以下の三つの共通点を挙げた。

- ① 窮地に陥った人物が脱出し、再興への意志を覗かせる。
- ② ①の人物が脱出に際し用いる手段は一時的な危機回避に過ぎず、神仏に絡む人や物の助けを借りずにはなし得なかった。
- ③ ①の人物が必ずしも再興を実現してはいない。

こうした共通点から、春町が何らかの危機的状況を穿つべく意図的に典拠を選んだ可能性が考えられる。更に第二節では、本作制作時期が鱗形屋の二件の重板事件の間に挟まれ、経営の低迷期と重なるため、春町が鱗形屋の危難を念頭において本作を制作した可能性を検討した。

黄表紙というジャンルが作者の私生活周辺の現状を暗示する

媒体かは疑わしい。しかし、黄表紙に作者の知己にのみ理解できる楽屋落ちの情報が盛り込まれていることは間違いない。

春町研究において春町と鱗形屋の関係を考えることは重要であり、書簡等の資料が未発見である以上、『三升増鱗祖』等の作品に描かれた版元の姿に注目することは有意義と考えている。

注

- 1 中村幸彦、日野龍夫編『新編稀書複製叢書 草双紙・洒落本・滑稽本』第五卷、臨川書店、一九八九
- 2 棚橋正博編『黄表紙総覧 前編』青裳堂書店、一九八八
- 3 森銑三『黄表紙解題』中央公論社、一九九七
- 4 松田高行「恋川春町の創作意識」『帝京平成大学紀要』第九卷一号、一九九七
- 5 松原哲子「『三升増鱗祖』について(一)」『実践國文學』第七七号、二〇一〇
- 6 注1と同様。
- 7 『新版 歌舞伎事典』池上文男、平凡社、二〇一一
- 8 柳瀬喜代志ほか校注・訳『新編日本古典文学全集41 将門記／陸奥話記／保元物語／平治物語』小学館、二〇〇二
- 9 『改訂新版 世界大百科事典』日下力、平凡社、二〇一四
- 10 加美宏「『太平記』評価と需要の系譜―『太平記評判』から『私本太平記』まで―」『國文學 解釈と教材の研究』第三六(二)、一九九一・二一
- 11 木村八重子・宇田敏彦・小池正胤校注『新日本古典文学大系83 草双紙集』岩波書店、一九九七
- 12 兵藤裕己『太平記(よみ)の可能性 歴史という物語』講談社選書メチエ、一九九五(講談社学術文庫、二〇〇五)
- 13 『浄瑠璃評判記集成 中』演劇研究会、一九六〇・七
- 14 徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』岩波文庫、二〇一四
- 15 佐藤貴裕『研究叢書節用集と近世出版』和泉書院、二〇一七
- 16 松木寛『葛屋重三郎 江戸芸術の演出者』日本経済新聞社、一九八八